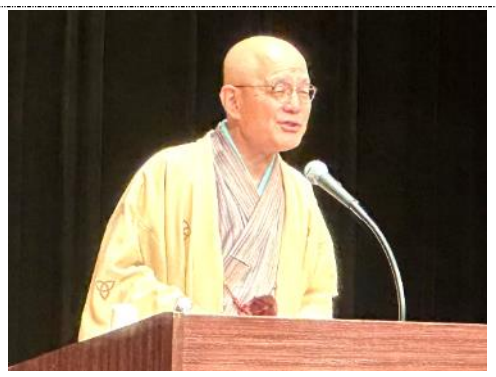
えがお

令和４年度
No.６
１２月１６日

伊那市
よりよい
教育環境
推進連絡会

伊那市人権同和教育講座講演会
『差別用語の正体 ～たっぷり笑って、少し考えて・言葉の重み～』
桂　枝女太さん（落語家）

市民大学との共催による伊那市人権同和教育講座講演会が、落語家の桂枝女太（かつらしめた）さんを講師にお招きし、伊那市生涯学習センター「ニシザワいなっせホール」を会場に開催されました。



桂枝女太さんは、大阪府豊中市のご出身で、高校三年生の三学期を残している正月に、故五代目桂文枝さんに入門しました。修行を終えたのち、落語家として高座に上がることはもちろん、次第にラジオパーソナリティ等でも活躍されるようになりました。

やがて講演会の依頼もくるようになりましたが、最初に人権講演会を依頼された時は、何を喋ったらよいか大変困ったそうです。しかし、落語家として、不特定多数のお客様の前で喋るので、言葉について勉強したり考えたりすることも多く言葉についてなら話せるのではないかと講演会のサブタイトルを「言葉の重み」としてきたそうです。

寄席で落語をするときもそうですが、ラジオやテレビ等、電波にのるような時には、特に言ったらいけない言葉「差別用語」、放送局では「放送禁止用語」に気を遣われているということです。また、昔は日常で使用していた言葉も、「～のくせに」という人を下に見る言い方を伴って使われて、それが人権意識の高まりと共に、相手を傷つけるきつい言葉として感じられ、放送局などの「自主規制」によって使わなくなったこと、今使ってはいけない言葉というのは、人権意識があまりなかった昔でも、言われた方は傷ついていて、言った方も、自分の中に、「まずいこと言ったかな。」という気持ちが残っているような言葉であること、とのことでした。

他にも、言いたいことが言えない空気になって長引いた戦争の話、言葉の言い替えとして、「お年寄り」が「高齢者」、「お百姓さん」が「農家の方」、表記の変化として「子供」が「子ども」や「こども」になっていったこと等、言葉についての様々なお話をしていただきました。

演題の通り、落語を聞いているように、楽しくたっぷり笑って、言葉の重みについて考える講演会となりました。

【参加された方からの感想】

○笑いをまじえて、言葉の重みについてお話をしていただき、いろいろと考えさせられることがありました。今の時代メールを使って、相手方と交信していますが、何気ない言葉でも相手方の感じ方とかを考えながら言葉を使いたいと思いました。

○おかげさまで、楽しく聞いて笑って良かったです。伊那市では毎年このような取組をしていただき、ありがとうございます。

○毎日の会話の中にも、心のやり取りの大事さを教わりました。思わず口から出てしまった言葉にも、消火器があり、「ごめんなさい。」の一言で丸い人生になっていけるということに気がつきました。楽しい中にも大切なお話をありがとうございました。

高遠中学校PTA講演会
「共に生きる」
上田女子短期大学講師　入安　ムニレ　さん

学校との共催による伊那市人権同和教育講座講演会は、今年度高遠中学校を会場に、ＰＴＡ講演会として開催されました。

講師の入安（いりやす）ムニレさんは、中国の新疆（しんきょう）ウイグル自治地区のご出身で、上田染ヶ丘高校の非常勤講師や上田女子短期大学で非常勤講師を務める傍ら、上田市の外国籍児童生活支援員、上田市子育てサポーター、上田市ボランティアセンター運営委員等、多くの立場でご活躍されています。

ムニレさんは、市役所や学校での手続きがとても大変だったこと、外国人だからお金を母国に送金するのだろうと勝手に判断されてお子さんの入学金が払えなかったこと、中国から来たと自己紹介をしていたのにずっとブラジル人だと思われていたこと等の体験談を通して、外国人にも日本人と同じように対応してほしいこと、外国人に対して先入観を持たないでほしいこと、例えば「どちらの国から来られたのですか。」と簡単なことから会話していくことから国際交流がはじまること等を教えていただきました。

他にも、上田に引っ越した時、地区の役員さんが訪ねてきて、地区での生活のきまりごとやお祭りのことなどを話してくれたり、近所の人が野菜を届けてくれたりして、とても感謝しているというお話もありしました。

二〇二一年十二月末現在、長野県には三万四千八百六十七人の外国人の方が住み、それは五十八人に一人という割合になるとのことですが、今回の講演から改めてお互いの文化の違いを認め合い、尊重し合う関係作りが大切になっていくと思いました。

【生徒の感想から】

「先入観」で勝手に、物事を決めつけたり自分だけの判断で行動してはならないと感じました。日本人、外国人は関係なく、ひとりの人間として接していくと良いと思いました。

【保護者の感想から】

どんな人とも「共に生きる」という考え方をすれば身近なことにも全て当てはまると考えさせられました。自分のまわりの人たちと「共に生きる」の精神で、おつきあいしていきたいと思います。

伊那北小学校PTA講演会
「ネット　ここが心配！ ～身近な大人として知っておきたいこと～」
一般社団法人 セーフティーネット総合研究所　代表理事　南澤　信之　先生

セーフティーネット総合研究所は、国民が安心・安全に暮らせる社会の実現に寄与することを目的として、調査研究やリサーチ、相談や講演・研修活動等セーフティーネットに関わる様々な事業に取り組んでいます。南澤先生は、本年度一学期に市内の各中学校で講演会を行い、二学期も何校かの小学校で講演をされています。

今回、伊那北小学校では、はじめに四～六年生の児童と保護者が講演を聞き、その後保護者が残って、お話を聞きました。

ゲームは、感情を刺激して依存状態になるように仕組まれているために、子どもたちはやめられなくなる。そこから発生する三大トラブルとして、「対立感情」（敵と味方）からのいじめ、他者よりも優越的立場を獲得するための「課金」、ネット内で知り合った人と安易に出会ってしまう「出会い」がある。健康への影響として、「眼のダメージ」、「脳発達への影響」、「生活リズムの崩れと体調不良」、「睡眠・精神・記憶・対人対応障害」があり、スティーブ・ジョブズ氏が自分の子どもたちにテクノロジー機器を利用することを厳しく制限していることも話していただきました。

その後、三つの生活習慣として、適切なスタート時間・利用時間・時間帯、読書習慣、会話の大切さを話していただきました。

保護者向けには、「課金」や「出会い」の被害事例、普段から二・三時間ネットやゲームをやっている子の時間を短くする方法、機器の設定の仕方などについて、お話していただきました。

すぐに取り組める具体的な方法を教えていただき、児童や保護者の皆さんのこれからの生活に大変役立つ講演会でした。

長谷地区生涯学習講演会「we are シンセキ！～つながろう　親も子も地域も～」レモンさん（山本シュウさん）

自分のことを「男の顔したただのおせっかいなおばちゃん」と言い切るレモンさんは、ＮＨＫＥテレ「バリバラ」の司会、小田和正さん、ミスチルの桜井和寿さん、ＧＲＡＹのＴＥＲＵさんなどが参加する厚労省主催のＡＩＤＳ啓発イベント「レッドリボンライブ」の総合プロデュースなどを務めながら、「全国子どもＹｏｕＴｕｂｅ相談チャンネル」の制作、スポーツメンタルコーチ、大阪大学で「教育論」の講師として十年以上「アクティブラーニング」の要素を取り入れた授業を行うなど、多岐にわたり活躍中です。

レモンさんが育った大阪の貧乏長屋には、おせっかいなおばちゃんたちがおり、そこで、幸せになるには、①食べ物、②仲間、③笑い、があればよいことを教わり、自分は明るい貧乏人だということです。また、誰でも無意識の中で、「誰か私のこと分かって～！」と叫び、コミュニケーションを求めている。コミュニケーションをとるためには、まず相手の話を最後まで聞く、そして、「つまり・・・っていうこと？」と言って確認してあげて、最後に「あぁ、そりゃそうだよね。」と同調することが必要なのだそうです。

その他にも「何でも話せる集団は強い。」「これが正解というパワハラ」「ＵＢ（アンコンシャッス・バイアス＝無意識の偏見）による押しつけ」、「ジュースをこぼしたら、『あー、ドラマチック！』とか、『さぁ～、キレてしまうのか』という実況法によるアンガーマネージメント」等々、私たちがちょっと意識すれば、ハッピーに生きていくことができるいろいろな楽しいヒントをいただきました。

講演の最初に、「いろいろなことをしゃべるが、自分の心に突き刺さったものだけメモするように。」とおっしゃっていました。しかし、どのお話も心に残る内容ばかりでした。

レモンさんは、まだまだ話すことが尽きないといった勢いで、ハイテンションのまま笑いの絶えない講演をされ、あっという間の一時間半でありました。

伊那市中学生キャリアフェス２０２２「はじめの一歩～無限大の自分へ～」

「伊那市中学生キャリアフェス」は、「地域で子どもを育てよう～子どもは地域の宝・地域の未来～」という伊那市キャリア教育憲章の下、伊那市の中学生が地域を知り、地域の人とふれあい、地域の未来を考えるきっかけとなる一日をつくることを目的に開催しています。今年は三年ぶりに参集しての開催となりました。

この日を迎えるまでに、伊那市内六校から選ばれた十二人の生徒実行委員の皆さんは、三月末から休日を中心に十一回もの実行委員会を行い、計画を練ってきました。その様子は、伊那市ＨＰの「キャリフェスだより」に詳しく掲載されていますが、十月三日の委員会もキャリフェスへの熱い想いが部屋いっぱいに満ちている雰囲気を感じました。

10/3 第８回実行委員会：参加する中学２年生が、キャリフェスを楽しみにしてくれるには、何をどう伝えたら良いか話し合っています。

当日は、エレコム・ロジテック・アリーナ（伊那市民体育館）に市内六校の全中学二年生が集まり、オープニングでは、キャリフェスの目的や内容を生徒実行委員の皆さんが楽しく紹介し、大人実行委員長の網野俊輔さんから「心のマスクを外していろいろな人とつながること。」、郷土愛プロジェクト向山孝一会長から「社会人の皆さんに将来どんな力が必要になるか聞いてみる。」といったお話を聞いた後、約八十の企業や団体などが出展しているブース巡りがはじまりました。

企業の方から話を聞いています。

歯科衛生士の体験をしています。

クロージングでは、感想を聞き合い、白鳥市長から伊那市の今と将来についてのお話を聞き、最後に全員で記念撮影を行いました。

参加した中学二年生の皆さんは、各ブースでの仕事の説明や体験だけでなく、職業に就いた理由や夢の実現、様々な生き方等の話を聞いて、身近な所で頑張っている大人のすごさを知り、将来を考えはじめる一歩になったのではないかと思います。

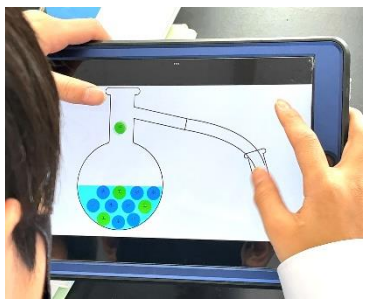
ここまで、頑張ってきてくれた十二名の生徒実行委員の皆さんとそれを周りで温かく支えていただいた多くの大人の皆さんに、学校では体験できない、大規模で貴重な学びができる機会を準備していただきました。

伊那市ICTカンファレンス　東部中・伊那東小公開授業

伊那市では、二〇一四年のｉｐａｄ導入から、ＩＣＴ機器を活用した授業を研究しています。二〇一五年から三年間、文科省の委託研究を行い、遠隔合同授業等の研究に取り組み、二〇一八年から機器整備と授業実践の両方の充実を推進するため、「ＩＣＴカンファレンス」を開催してきました。

今年度は、「未来を生き抜く力を育む」をテーマに公開授業・授業研究会・講演会が行われました。

東部中一年生の理科の授業では、水とエタノールの混合液を加熱した時、それぞれの分子がどのような動きをするのか、アニメーションで表現し、グループで説明し合いました。また、伊那東小三年生の算数の授業では、身の回りにある丸い物をタブレットで様々な方向から撮影して、友だちと話し合いながら、どこから見ても丸いものとそうでないものがあり、そこから「球」について学ぶ活動をしました。



授業研究会の小学校部会では、信州大学教育学部准教授の森下孟先生に、中学校部会では同じく谷塚光典先生にご指導をいただきました。

講演会は、ＢａｒｂａｒａＰｏｏｌ代表取締役であり、一般社団法人ＳＴＥＡＭ　ＪＡＰＡＮ代表理事でもある井上祐巳梨さんから、「日本の未来変える『ＳＴＥＡＭ教育」と題して、次世代に生きる子どもたちに必要な教育について、「課題を見つける力」「物事を様々な面から捉える力」「新しい価値を創造する力」を育てるために、多くのご示唆をいただきました。また、伊那市内各小中学校の先生方も講演会をオンラインで聴講し、研修を行いました。

手良小「大学生授業ボランティア」

手良小学校では、伊那市が募集したボランティアとして、将来教職を目指す大学生二名が授業サポートをしています。

学生さんは、五年生の算数の授業で、主に答え合わせをして、担任の先生は、進み方がゆっくりな児童に個別指導をしたり、課題が終わってしまった児童に発展的な課題を出したりして、個々の児童に合った学習場面を設定していました。

県外では教育実習以外で、大学の授業の合間に、ボランティアをやる学生さんは珍しくなく、担任の先生は「教師を志す学生が減っている昨今、希望があれば受け入れてあげたいし、自分も若い人と、かかわる時間を大切に考えたい。」とお話され、学生さんにも先生にも、ありがたい機会となっています。

（問い合わせ先　伊那市教育委員会生涯学習課　℡78-4111　内線 2722）